様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２７５

研究課題名（和文）アーノルド・ベネットとその周辺ーリアリズム小説における現実と表象の批判的再検討ー

研究課題名（英文）Arnold Bennett and His Milieu: Critical Reexamination of Realist Representation

研究代表者
井川　ちとせ（IKAWA, Chitose）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：２０４０１６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：郷里のイングランド中部地方を舞台に市井の人びとの日常と心理を克明に写し取った「リアリズム作家」として長らく文学史の周縁に置かれてきたアーノルド・ベネット（1867-1931）と、その晦渋さゆえにつねに精緻な読解の対象とされるヴァージニア・ウルフ（1882-1941）、ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）、T. S. エリオット（1888-1965）ら「モダニズム作家」との同時代性に注目し、ジャーナリズムと学術研究というふたつの領域間の交渉を跡づけることで、リアリズムからモダニズムへという単線的な発展史の見直しをおこないました。

研究成果の概要（英文）：This research has rectified the dominant narrative of the modernist turn from realism in English literature. In this progressive, linear developmental history, Arnold Bennett (1867-1931) has been marginalized because of his putatively outmoded formal technique in detailing the quotidian existence of ordinary people in the English Midlands, while the younger and supposedly more cosmopolitan authors, such as Virginia Woolf (1882-1941), James Joyce (1882-1941), and T. S. Eliot (1888-1965), are central figures whose abstruse styles have been deemed worthy of perpetual critical scrutiny. Focusing on the largely overlooked contemporaneity of so-called Edwardian realist authors and self-styled Georgians, as well as attending to the material context of literary production and consumption, I mapped the complicated process of negotiation between journalistic print culture and aspirations for disciplinary credibility on the part of scholars.

研究分野：英文学

キーワード：英文学　リアリズム　ミドルブラウ　モダニズム　脱/文脈化

１．研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究動向

研究開始当初、文学的リアリズムおよびアーノルド・ベネットに関する研究は、国の内外を問わず、活発におこなわれているとは言いがたい状況にあった。19 世紀中葉から世紀末にかけて芸術運動の中心であったリアリズムは、今日では、ポストモダンの懐疑論的立場から、過去の遺物として黙殺されるか、黙殺されないまでも、「現実」を無媒介に捉え、それを包括的に再現・表象せんとする指向が、ナイーヴの誹りを受けるか、その全体性への指向を支える帝国主義的欲望が早晩モダニズムに乗り越えられるといった、単線的発展史観によって総括される。

国外では、1990 年以降に刊行されたリアリズムに関する研究書は、Matthew Beaumont, Ed., *Adventures in Realism* (Malden: Blackwell, 2007) ほか数冊のみ、ベネットのモノグラフは、Robert Squillace, *Modernism, Modernity, and Arnold Bennett* (Lewisburg: Bucknell UP, 1997) のみであった。こうした趨勢のなか、イギリスの Arnold Bennett Society は、2004 年より学術研究の成果発表のための年次大会を開催し（研究代表者は 2009 年より会員）、元会長 John Shapcott を中心に、ベネット初の入門書 *An Arnold Bennett Companion* (Leek: Churnet Valley Books) の編纂が進められ、研究代表者も１章の執筆を分担した。翻って国内では、ベネットを主に扱った学術論文は、CiNii の検索結果全 16 件のうち、1990 年代以降に出版されたものは拙論３件に限られた。

(2) 着想にいたった経緯

学術書市場に流通している上述のような単線的あるいは二項対立的な図式化に疑問を覚え、リアリズム研究の新たな可能性を示したいと考えたのが、本研究の着想にいたった経緯である。芸術生産とその消費のより複雑な過程については、2000 年以降おもにイギリスと北米の研究者の間で「ミドルブラウ」や「インターモダニズム」といった鍵概念のもと検証が進められていたが（Nicola Humble, *The Feminine Middlebrow Novel 1920s to 1950s*, Oxford: Oxford UP, 2001; Kristin Bluemel, Ed., *Intermodernism*, Edinburgh: Edinburgh UP, 2009; Erica Brown and Mary Grover Ed., *Middlebrow Literary Cultures*, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2012 など）、芸術様式としてのリアリズムとモダニズムの相互作用について、さらなる考察が求められると考えた。

２．研究の目的

(1) 現代におけるリアリズムの可能性

重く「リアル」な現実を全体的に捉えたいという切迫した思いと、複雑なプロットと視点で構成されるモダニズム以降のスタイルとの齟齬は、今日ではカズオ・イシグロの創作活動（日本英文学会関東支部ワークショップ「原子力と文学」、2011 年 7 月 11 日、於成蹊大学での大貫隆史・河野真太郎両氏の指摘）や、9.11 の経験を語る Mohsin Hamid, *The Reluctant Fundamentalist* (2006)などに例証されよう。単線的文学史におけるロマン主義とモダニズムの間の相応な位置をリアリズムに確保することで事足れりとするのでなく、現代におけるリアリズムの可能性を探るために：

① エーリヒ・アウエルバッハ、ジェルジ・ルカーチ、フレドリック・ジェイムソンによるリアリズム論の批判的再読を目指した。文学的リアリズムを、19 世紀の民主主義精神の発露と解釈すること、あるいは、作中にモダニズム的感受性の胚胎を見出すことで、リアリズム文学を擁護することの妥当性の有無を明らかにしたいと考えた。

②「リアル」の意味そのものを吟味する。批評家 Mary Poovey が指摘するように、現実と表象との関係が「問題」となるのは、特定の歴史状況においてのことであるかもしれない。今日、大学院教育を受けていない読者にとって、リアリズムやリアリスティックといった表現は、フィクションに描かれた世界とフィクション外部の世界との類似を意味するのに対し、「プロの文学批評家」は、これらの用語を、そのような類似の効果を生む形式上の約束事の意味で用いる（*Genres of the Credit Economy*, Chicago: U of Chicago P, 2006）。専門化の謂いである近代化の過程で、小説がみずからの情報提供機能を否定して経済論説などと袂を分かつのにつれて、文学批評は、読むことを、他の高度に専門化された職業と変わらぬ難しい営みに変えてしまったと言える。この、読むことの専門化は、ベネットが、百年前のイギリスに触れようとする一般読者に読み継がれながら、学術研究においては等閑視される現状と符合する。本研究においては、文学テクストと史資料の両方から、一般読者、市井のひとびとにとって「リアル」な経験を語るとはどのような営みなのか、明らかにすることを目指した。

(2) 中産階級の男の経験の可視性あるいは不可視性

批評家 Dan Bivona と Roger B. Henkle は、19 世紀半ば以降、ブルジョワ男性の主体形成において中心をなすビジネスの世界での苛烈な競争の経験が、小説においてはごくまれにしか描かれないこと(すなわち否定されるべきものとして表象を与えられないこと)、その経験が描かれるのは、サミュエル・スマイルズの『自助』（*Self-help*, 1859）のような指南書であることを指摘し、この現象をブルジョワ資本主義の矛盾と解釈している（*The Imagination of Class: Masculinity and the Victorian Urban Poor*, Columbus: Ohio UP, 2006）。しかし

ビジネスの経験は小説に描かれないのではなく、それを描いた小説が文学史から排除されてきたに過ぎないのではないか。小説においてブルジョワ男性の成功譚を語ると同時にセルフ・ヘルプ・マニュアルで成功の秘訣を説きもしたベネットの仕事とその周辺のテクスト（独学用教科書、副業の手引き、労働組合機関誌など）をたどることで、中産階級の男の経験を再構築することを目指した。

３．研究の方法

研究はおもにつぎの四つの方法で進めた。第一に、文学的リアリズムの新たな理論構築のための、過去の代表的理論の批判的再読、第二に、文学や日記、書簡などのテクスト分析、第三に、中産階級のひとびとの生きられた経験をたどるための文書館などでの史資料調査、第四に、イギリスを中心とするベネット研究者らとの情報・意見交換である。

４．研究成果

(1) ホワイトカラー労働者の経験の再構築および文学テクストの流通・受容に関する考察

日本英文学会関東支部第 8 回大会（2013 年 11 月 2 日、於日本女子大学）において、英米文学部門シンポジウム「work と 20 世紀転換期の英米文学」の司会兼講師として「アーノルド・ベネットと clerical work」と題した研究発表をおこなった。本発表においては、ベネットの長編小説 5 作と文芸コラム、各種労働組合の機関誌や文芸誌の言説に注目し、20 世紀転換期の新しい識字層をターゲットとした連載小説のフォーマットについて考察すると同時に、ホワイトカラー労働者に要求される技能が、リアリズム小説においてロマンスの媒介として、またプロットを駆動する契機として機能するさまを分析した。平成 27 年 4 月には、論集 *An Arnold Bennett Companion* Ed. John Shapcott (Leek: Churnet Valley Books) の第 11 章"Bennett and the Philosophy of Self-Help" を分担執筆した。本章では、「ポケット哲学」 として知られるベネットの独学者向け指南書が同時代のセルフヘルプ市場に占めた位置や、社会的地位と精神の安定を求めるホワイトカラー労働者を取り巻く多様な言説について考察した。いずれも、従来研究が比較的手薄であった、リアリズム文学が描きその文学の需要者でもあった下層中産階級のひとびとの経験を、史資料の実証研究と文学テクスト分析を総合するアプローチによって再構築することで、学際的な広がりに貢献し得たものと考える。また、Edwardian Culture Network 主催の国際会議 “Arnold Bennett and his Circle”（2014 年 10 月 17 日、於 Keele Univeristy）および Arnold Bennett Society 第 12 回年次大会（“Bennett Abroad: Bennett’s Perception of Other Countries and their Perceptions of Bennett）において、それぞれ “Arnold Bennett and the Rising Generation in Imperial Japan” および “Arnold Bennett and the Contemporary Japanese Reader” と題した研究発表をおこない、日本の英文学研究と出版産業における、美学的探究と脱亜入欧の政治的野心との交錯を分析し、文学テクストの流通と受容に関する研究の射程を同時代の日本にまで延ばした。

(2) 文学テクスト生産のコンテクストおよびジャーナリズムと学術研究の２領域間の交渉の検証

日本英文学会第 86 回大会において、第 4 部門シンポジウム「ミドルブラウという名の挑発」の司会兼講師として、「『文学趣味』、自己改善、ミドルブラウ」と題した研究発表をおこなった。また、本研究発表の原稿に大幅に加筆した論考「リアリズムとモダニズム—英文学の単線的発展史を脱文脈化する—」を一橋大学社会学研究科紀要『一橋社会科学』第 7 巻別冊「特集：「脱/文脈化を思考する」に寄稿した。これらは、郷里のイングランド中部地方を舞台に市井の人びとの日常と心理を克明に写し取った「リアリズム作家」として長らく文学史の周縁に置かれてきたアーノルド・ベネット（Arnold Bennett: 1867-1931）と、その晦渋さゆえにつねに精緻な解読の対象とされるヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf: 1882-1941）、ジェイムズ・ジョイス（James Joyce: 1882-1941）、T. S. エリオット（T. S. Eliot: 1888-1965）ら「モダニズム作家」との同時代性に注目し、リアリズムからモダニズムへという単線的な発展史の脱文脈化を試みるものである。いくつかの（リアリズム小説の周縁性ゆえにあまり多くない）先行研究が、リアリズム小説のなかにモダニズムの実験的スタイルの萌芽を見ることでリアリズムの価値を高めようと目論むのに対し、本論の目的は、リアリズム小説の実験性を吟味することではなく、実験性、それもある種の実験性に富むことをもって論じるに値するテクストと定めるような文脈化の力学を検討することにある。おもに 1880 年代から 1930 年代までの文学テクスト生産の物質的コンテクストを考察の対象としながら、ジャーナリズムと学術研究という２つの領域間の交渉を跡づけた。

また、1920 年代に新たに英語の語彙に加わった middlebrow というカテゴリーの批評的有効性についても、文芸誌を「その内的証拠」と読者層をもとに３つのクラス（ハイブラウ、ミドルブラウ、ロウブラウ）に分類し、アーノルド・ベネットの書き物が「もっとも凝縮した形で」代表するミドルブラウおよびロウブラウの商業ジャーナリズムの隆盛を憂えた同時代の研究者 Q. D. Leavis や F. R. Leavis の著作を参照しつつ、

検討した。この点に関してはさらにレビューエッセイのかたちでも考察を深めた（Chitose Ikawa, “Erica Brown and Mary Grover eds., *Middlebrow Literary Cultures: The Battle of the Brows, 1920-1960*, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2012” *Studies in English Literature,* English Number 通巻 57 号, 2016 年 3 月 1 日)。本レビューエッセイにおいては、日常的に英文学のキャノン形成に関与する「プロの」教師あるいは研究者が、Brown and Grover の論集からいかなる実践的示唆を得られるかという点についても検討した。具体的には、英文学科を設置しない多くの日本の大学においてとくに、従来のキャノン中心のカリキュラムからテーマに沿ったアプローチへの移行の可能性を提言した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 井川ちとせ、リアリズムとモダニズム――英文学の単線的発展史を脱文脈化する――、一橋社会科学、第７巻別冊、2015 年、査読無、61-95 〈http:/ / hdl.handle.net/ 10086/ 27127〉

〔学会発表〕（計 4 件）

① Chitose Ikawa、Arnold Bennett and the Contemporary Japanese Reader. The Twelfth Arnold Bennett Conference, 2015 年 6 月 6 日, The Northstaffordshire Conference Centre (Staffordshire, UK),

② Chitose Ikawa、Arnold Bennett and the Rising Generation in Imperial Japan, Edwardian Culture Network, 2014 年 10 月 17 日, Keele University (Staffordshire, UK),

③ 井川ちとせ、「文学趣味」、自己改善、ミドルブラウ――Arnold Bennett と読者たち、日本英文学会、2014 年 5 月 24 日, 北海道大学（北海道札幌市）

④ 井川ちとせ、アーノルド・ベネットと clerical work、日本英文学会関東支部、2013 年 11 月 2 日、日本女子大学（東京都・文京区）

〔図書〕（計 1 件）

① John Shapcott (Ed), David Amigoni, Kurt Koenigsberger, Alan Pedley, Catherine Goodwin, Sharon Crozier-De Rosa, Fred Hughes, Nicholas Redman, Anthony Patterson, Randi Salman, Deborah Wynne, Chitose Ikawa, Leslie Powner, George Simmers, Churnet Valley Books, *An Arnold Bennett Companion*, 2015, 285 (209-228)

６．研究組織

(1)研究代表者

井川 ちとせ（IKAWA, Chitose）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：20401672